

安 全 教 育



第33号

平成24年
2月24日発行
発行責任者
齋藤武彦

財団法人 横浜市安全教育振興会 横浜市中区港町1-1 横浜市教育局内
〔事務局〕 〒231-0014 横浜市中区常盤町3-25 サンビル7階 電話 045-662-7835 FAX 045-662-9831



公益財団法人 横浜市安全教育振興会へ向けて

財団法人横浜市安全教育振興会
理事長 齋藤 武彦

公益認定に向けてスタート

昨年9月29日に開催された評議員会と理事会において安振会は、平成25年度から公益財団法人に移行し新たに活動することが決定されました。

財団移行に関しましては、会報29号から毎年、移行のための検討状況や取組についてお知らせしてまいりました。その間、国の指針が二転・三転し、安振会のメイン事業である見舞金等給付事業が公益目的事業として認められるのかをめぐって不安な時期があったことも事実です。しかし、前号でもお知らせいたしましたように、PTA共済法が成立し、さらに見舞金等給付事業が公益目的事業として認められることになったことで、社会的ステータスが高く、税制面で優遇措置を受けられる公益財団法人への道が開けたのです。今号では、財団移行認定申請とそれに伴う共済事業認可申請に向けた取組の概要をお知らせいたします。

財団移行に伴う様々な課題に対して原案を作るべく「財団移行等検討委員会」が昨年7月にスタートいたしました。平均毎月1回のペースで種々の課題を検討したり、原案を作成したりしてその月の評議員会・理事会に提案する形をとっています。例年ですと年間2回しか開催されない評議員会ですが、本年度は重要事項の検討をできるだけ多くの方に検討いただきたいということで、理事会と同じ日には毎月開いています。

定款・共済規程の作成

財団移行等にとって、まず手をつけなければならないのは、定款（現在の寄付行為にあたる）の変更の認可を受けることです。「定款」は、安振会の大本になる決めごとが盛り込まれるものですが、現行の寄付行為を基に整備法に定められた内容を含め、変更案を作ることになります。2月の理事会では議決し、3月中には定款変更の認可申請をする計画です。

「共済規程」は、毎年各ご家庭に配布している「安全教育の振興に向けて ご案内」の内容にあたるものです。内容の検討の過程で、現行では給付対象になっていない「熱中症」に対しても、「PTA行事中」という限定付きで給付対象とすることとなりました。また、最近多くなってきた「ギブスシーネ」「アルフェンスシーネ」といった装具を使用した時にも見舞金を給付する方向で検討しています。この共済規程は4月から評議員に就任していただく方々により検討・議決される予定です。

新財団における財産の割振り

安振会には3億5,000万円の基本財産と約1億5,000万円の運用財産があります。新財団に移行するには、これらの財産を事業ごとに割振る必要があります。そこで、現在の諸事業を「共済事業」「修学奨励金給付事業」「助成事業」「賠償責任事業」「法人会計」の5つに整理をしてそれぞれの事業で効果的に活用できるようその割振りを検討しているところです。また、共済事業の中では、「責任準備金」や「異常危険準備金」「支払備金」等々、法律で一定金額以上の積立が規定されるものもあります。

こうした諸事業や諸準備金への割振りを評議員会と理事会で決定していただき、共済事業認可申請と公益財団法人認定申請をすることになります。そして、公益認定申請の時期は、共済事業の認可を受けて7月頃と考えております。

このように、安振会は平成25年4月1日より新たな公益財団法人として出発するために、多くの方々のご協力を得て鋭意取り組んでおります。今後とも、会員の皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。

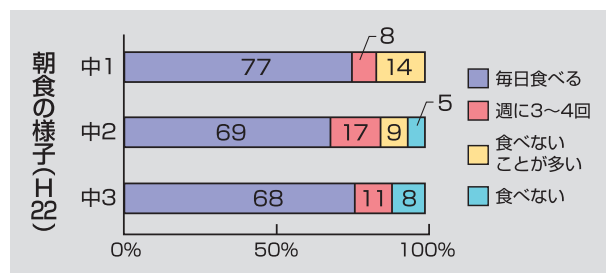
生徒の行動変容をめざした健康教育の取組 ～体験的活動を通して学ぶ～

横浜市立富士見中学校

本校には生徒の健康について考える「健康づくり推進委員会」が組織されています。この会では毎年11月に、食・健康に関する全校調査を実施し、結果分析をし、その中から見えてきた課題を明らかにし、解決していく取組を実践しています。また本校は外国につながる生徒が在籍の40%を占めており、日本語の習得が十分でない生徒も多数おり、出来るだけ具体的で、わかりやすく、体験的活動を通して健康についての理解を深める内容で実施しています。今回は展開してきた実践内容の一部を紹介します。

〈調査から見えてきた課題〉

- ①朝食の欠食率…**17%**
- ②昼食をコンビニ等で購入する生徒…**約20%**
〈おにぎり1つ、菓子パン1つだけの生徒もいる〉
- ③健康や安全についての関心が低い。



〈取組1〉学校全体行事・学年行事

①「骨密度測定を通して健康な生活を考える」

をテーマに平成21年度から中区福祉保健センターに協力を依頼し、骨密度測定を実施しています。その後、結果をもとに成長期の食生活について21年度は全校で学習を行いました。本年は対象を1年生に絞り、家庭科領域の食の学習とともに、成長期の食生活が将来の健康な生活に影響を与えることの大きさを生徒が確認でき、今をどう過ごすか、考える良い機会になりました。今後も地域の協力を得ながら進めていきます。



(写真 骨密度測定)

授業後の生徒の感想

- ◎骨粗しょう症について初めて知った。
- ◎毎日の食事に野菜が不足していることがわかった
- ◎買う弁当の中身を考えなければいけない。
- ◎成長期を大切に過ごさないと大人になったときに健康でいることが難しいと思った。

②交通安全教室の実施

最近増加している自転車事故の防止のために、中学1年生を対象に伊勢佐木警察・中区交通安全協会の協力を得て交通安全についての講話、および安全な自転車の乗り方や傘をさしての片手乗り、携帯電話を使いながらの乗車等の指導を毎年受けています。



(写真 交通安全教室)

③卒業期における体験活動

◎「救える命を救おう。自分たちの出来ることをそのときにやろう!」をテーマに3年生全員が普通救命講習=心肺蘇生法・AEDの使用方法について実習を行っています。

◎「妊婦疑似体験」

生命誕生の素晴らしさ・命の尊さ、妊娠出産の大変さを男女ともに体験し将来自分が家族の一員となった時に何が出来るかを考えます。

〈取組2〉生徒活動→生徒保健委員会

全校生徒が健康、安全について関心を持ってもらえるように、委員会でも内容の検討を重ね、実験・研究したことを特に集会時の発表の方法、掲示物の配置に工夫をしながら活動を行っています。

◎清涼飲料水の糖分調べと衛生的な容器の扱い

糖度計を用い、含まれている砂糖の量について調べ報告をしました。冷やした飲料水は甘さを感じず、ついつい飲みすぎになってしまい、糖分の取り過ぎにつながることを学習しました。また、寒天培地を利用しペットボトル、箱入り飲料の飲み口の細菌や飲みかけの飲料の細菌を調べて、回し飲みや、直接口をつけて飲んだ飲料を長時間持ち歩いたりした場合の細菌の状態について実験を行い、水分補給とともに飲み物の容器の扱い方についても情報を提供しました。

◎この他にもヨードデンプン反応を利用して、手の洗い残しを実験し、日常の手の洗い方は果たしてどうなのか、かぜ予防の鉄則、「うがい、手洗い」とも関連づけました。また、夏の衛生的な衣服管理では、汗を含む衣服の汚れの状態について運動部の協力を得て条件をつけた設定でTシャツを着て過ごしてもらいニンヒドリンを使って汚れの様子を実験し全校集会で発表を行いました。どの活動も実際に目で結果を見ることができ、生徒からは具体的でわかりやすいといった感想も寄せられました。

健康に関する情報は周囲にあふれていますが、生徒ひとりひとりが「なるほど、そうなのか」と実感、理解して日々の生活の改善・行動変容ができるような健康教育を今後もすすめていきたいと思えます。

「きらめく心 かがやく笑顔」の具現化をめざして ～PTAの果たす役割～

横浜市PTA連絡協議会

はじめに

横浜市PTA連絡協議会で現在全会員を対象に実施している研修会は次のとおりです。

①横浜市PTA交流研修会

②横浜市PTA連絡協議会研修会

研修①は、実践発表等による事例研修

研修②は、自己研さんを図る研修

昨年来、研修テーマを「人のつながり」として研修を深めてきました。今年度実施した研修会は次の通りです。

研修①「川と海をつなぐ自然再生」

研修②「地球のステージ4」

本稿では、研修を通して「PTAの果たす役割」について考察し以下にまとめました。

研修概要

研修①

大道小学校のトンボ池の水が枯渇し始めた。トンボ池を取り戻そうと元PTA会長の相川さんが中心となり池の近くで井戸掘りが始まった。その活動に地域、卒業生、子ども、保護者が加わり池の再生が川に広がり、そして海へと水の流れに沿って地域の環境保護につながる実践が報告された。もう一人の講師の木村さんはNPOとして海の再生に携わっている。木村さんからは、横浜は河川が短く上流の変化の影響が短時間のうちに海の変化に現れること、山、川、海は繋がっておりその変化に関心を持つことが人が集まり、自然再生につながっていくことが実践報告された。

研修②

宮城県名取市の医師、桑山紀彦氏による「地球のステージ4」では、紛争地や自然災害などの問題を抱える国への医療支援に奔走する桑山氏やともに行動するNGOの活動が語りと映像により紹介された。入国が困難な国もある中で厳しい環境下での献身的な活動、何年にもわたって継続させる思いに感動を覚えた。国内においても、自らの診療施設が東日本大震災で被災したが、地域医療の拠点として施設前の灯りを24時間灯し続け診療にあたる状況も報告された。

研修からの学び

《つながりを築くPTA》

研修①、大道小学校地区の事例から、つながり、継続性などにおけるPTAの役割や特性について考えた。世代や立場を越えた協働は他にも多数あると思う。PTAはそうした協働する場面に保

護者同士が話し合い、スムーズに参加できる役割を果たすことができる組織である。言い換えれば、子育てを終えた世代と現役世代をつなぐ役割を担っていると言える。

《継続性をもたせるPTA》

「できる人ができるときに、無理なく、楽しく」

できない人ができないときに無理をすれば活動を楽しむどころか、マイナスのしわ寄せが、子どもたちにも影響していく。笑顔が見出せない体制は、事業の継続に支障をきたす。できるときにできる人が楽しく活動できることこそ、話し合っ決めていくPTAの特性にマッチしている。

「一に自助、二に共助、三に公助」

まずは自分たちの立ち位置を確認し、広く耳を傾け、アイデアを出し合い精査して、自分たちにあった活動をできるところからはじめよう。そうすれば、次へと繋がっていくであろう。

《外国人児童生徒と保護者》

研修② 地球のステージでは、海外で分け隔てなく医療活動に取り組む桑山氏の活動に感銘を受けたが、翻って、私たちに何ができるだろうか、ということを考えた。桑山氏と同じようなことは無理として、分け隔てなく、という部分でできることはあると思う。「きらめく心 かがやく笑顔」がすべての子どもの姿に現れてほしいとだれもが願っている。このことに関連して、今年度、日本PTA関東ブロック大会で、本市から人権・国際理解の分科会で自校の実践を発表したいちよう小学校とPTAの取組が記憶に新しい。外国人児童生徒とその保護者、PTAの問題は、国際化がいつそう進展するわが国でどの学校でも数の差はあるものの生じている問題だと思う。国際理解教育や国際教育は、もとより学校教育の範疇であるが、その保護者に係る課題の解決にPTAの力が欠かせない。

「PTAの果たす役割」

昨年の東日本大震災では多くのものが失われました。しかし、被災地では子育てに頑張る保護者や地域の方々、懸命に生きる子どもたちの姿があります。そうした被災地や被災地から避難してきた子どもたちや保護者の心に寄り添い、遊びや学習支援など、ボランティアとして支援する輪が広がっています。身近な人の日常の何気ない関わりや温かいふれあいが、子どもたちにとって大きな心の拠りどころになっているものと思います。PTAの目的、PTAがもつ特徴などPTAの原点を大切に、すべての子どもたちの笑顔につながるよう、これからも横浜市PTA連絡協議会は各種事業の充実や研究・研修活動の充実をさらに図っていき考えています。

インタビュー

東日本大震災から学ぶ

横浜市民防災センター
岡崎 知博 所長



防災教室で毎回ご講演をいただいている
市民防災センターの岡崎所長さんに震災への備えや
発生した時の対応についてインタビューをさせていただきました。

●インタビュアー / 安振会事務局 小山恵美

Interview

地震発生時の対応について

地震の揺れは長くても3分くらいです。「グラッ」ときたら頭をはじめ身の安全を確保することです。揺れがおさまったらすぐに火の始末を忘れないでください。そして隣近所に声掛けをすることです。

地震発生時に繁華街にいた時には、まず建物から離れることです。ガラスや壁、看板等が落下してくる危険があるからです。どうしても離れられない場所では、建物の陰に身を隠しましょう。

また、地下街で発災した時ですが、地下街は耐震構造になっているので、比較的安全といえますが、まずは、ショーウィンドウや陳列棚、看板などから素早く離れ、手荷物などで頭や首を守りながらなるべく広いスペースへ移動しましょう。そして、揺れがおさまったら非常口から地上へ脱出することです。外へ出る時には、いきなり出ず必ず周囲の状況を確認してから出るようにしましょう。

津波について

横浜市のガイドラインでは、3階建て以上の堅牢な建物、又は、5m以上の高台に避難することになっています。しかし、様々な状況を想定して、津波避難施設等のより安全な場所に避難することが大切です。

そして、何よりも大切なことは、マニュアルは必要だがマニュアル通りの対応ではなく、臨機応変な対応ができるようにすることなのです。「津波でんでんこ」という言葉が三陸海岸地域に言い伝えられています。これは「津波が来たら、各自バラバラにすぐに高台へと逃げろ」という意味だそうです。

今後の課題について

3.11の災害時に、横浜の小学校では子どもたちを帰宅させた学校とさせなかった学校が半々だったそうです。保護者が帰宅困難者になりうる可能性が大きいので、それぞれの学校と保護者とで対応をきちんと決めておくことが必要でしょう。また、連絡手段の確保についても決めておきたいものです。

学校は避難所に指定されていますが、あらためて地域の方々と話し合い、協力体制を確認する必要があります。

そして、何よりもまずお願いしたいことは、「家族の防災会議」を開き、安否確認の方法や避難先、帰宅困難時の対応、集合場所等について家族全員で確認してほしいということです。

(インタビューは12月21日に横浜市民防災センターで行われました。)

家族の防災会議を開きましょう

平成23年度 安全教室の開催

● 会 場／横浜市民防災センター

	日 時	防災安全教室 9:50～11:50	救急救命法教室 9:00～12:00
第1回	平成23年 6月17日(金)	31名	36名
第2回	平成23年 7月 8日(金)	37名	48名
第3回	平成23年 9月 9日(金)	48名	51名
第4回	平成23年 10月 7日(金)	45名	49名
第5回	平成23年 11月 4日(金)	33名	42名
第6回	平成23年 11月25日(金)	32名	42名
	計	226名	268名

防災安全教室

〈内 容〉

- 防災講和
- 地震体験
- 消火器体験
- 展示コーナー
見学



救急救命法教室

〈内 容〉

- 普通救命講習
 - ・心肺蘇生法
 - ・「AED」の
取扱い方法
 - ・止血法



平成23年度 賠償事故状況概要

(12月末日現在)

総 数	校 内	校 外	ガラス破損	車損傷	メガネ損傷	対人事故	その他
347件	154件	193件	112件	106件	43件	45件	41件

ガラス破損の内訳

車損傷の原因

自転車事故の内訳

校内 78件			校外 34件			自転車	ボール	石	その他	対車	対人	その他
小学校	中学校	特別支援	小学校	中学校	特別支援	42件	11件	31件	22件	42件	18件	3件
20件	55件	3件	27件	6件	1件							

■ 昨年度の賠償事故状況と比べて

今年度は総数件数が約60件ほど減少しました。特にガラス破損とメガネ損傷の減少がその多くを占めています。しかし逆に、車損傷は2割強の増加となっています。具体的には、自転車によるものと石が当たったの原因による車損傷が増加しています。

■ 今年度の賠償事故状況より

- ガラス破損が減ったとはいえ、校内事故(154件)の四分の三弱を占めています。
- 自動車損傷の事故は昨年度よりも件数が増加しただけでなく、総件数に対する割合も昨年度より約10%増加し30%を超えました。
- 自転車による対車、対人の加害事故も、昨年度より3割ほど増加しています。自転車のスピードの出し過ぎやブレーキの整備不良が原因となっているようです。学校や家庭でも、自転車の安全で正しい乗り方について、改めて確認をお願いいたします。

情報・消費社会と子ども

～子どもの自立と教育を考える～

講師／横浜国立大学 教授

高橋 勝先生

平成23年10月25日(火)

横浜市教育文化センター

教育文化ホール

参加者約480名

(横浜市内小/中/特別支援学校/高校保護者、
教職員、学校関係者)



戦後の子どもの 成育空間の変貌

子どもが、社会の影響をどのように受け変化するのかに
ついての話をします。戦後の子どもの成育空間の変貌を生
産様式で分類すると、3つに分かれます。

「村を育てる学力」の 農耕型社会

1945年から高度経済成長が始まる寸前の60年までは、
農耕型社会のなごりがたっぷりありました。盆踊りなどのよう
に、地域共同体が人間関係の中心にありました。お正月に
は本物の門松を飾りました。

教師たちは貧しい地域社会を科学や技術で生活しやす
い村にすることを目標に、指導しました。当時、東井義雄さ
んが書かれた本のタイトルにもある『村を育てる学力』とい
う考え方です。勉強ができなくても、丈夫で元気ならいいとい
うファジーな社会が、後の高度経済成長を支えました。

「一人前の村人」という言葉があります。ひとり用のお膳
で食事ができるようになる、これが「一人前」になったとい
う概念です。現在、「一人前」は死語に等しく、大卒でも就職
できず転職率も高くて、「高校、大学を卒業したら一人前」と
いう言葉が、死語に等しく空疎化しています。

「みんな一緒」の工業型社会

続く60年から75年までの工業型社会は、高度経済成長
期でした。東北など地方から「金のたまご」と呼ばれる中卒

や高卒の労働力が集団就職列車に乗って都会に集まりま
した。私も当時、「京浜工業地帯が重工業を担い日本の未
来を切り開く」と習ったものです。

『教育の過程』の著者、J・S・ブルーナーは、「高度な自然
科学の知識でもシンプルに構造化してわかりやすく子ども
に教えることができる」と提唱し、経済成長著しい日本はそ
れを導入しました。子どもに限らず大人も、教育して社会の
発展に活用する、という考え方が広がりました。生涯学習が
盛んとなった時代です。

この時代の長所のひとつが「みんな一緒」という考え方
です。8割に中流意識がありました。会社も終身雇用で、社
員寮のように個人的な福利厚生まで組織が面倒をみたの
です。集団が中心で、競争感覚もさほどありませんでした。

「子どもが選択する」 情報・消費社会に

そして、75年から現在も続いているのが情報・消費社会
です。73年と79年のオイルショックで、右肩上がりの成長は
急下降し、これまでの労働や生産の時代から、個人消費を
喚起してモノを売る時代になりました。よき労働者、よき市民
になるより、消費生活をエンジョイする感覚が、メディアを通
じて増幅されていきました。

高度成長期までは、電話も車もテレビも一家庭(集団)に
1台でしたが、今では9割以上の高校生が携帯電話をもっ
ています。一人ひとりが選択の主体であり、消費者が王様
になります。自己実現をめざし、“同じ”を嫌うようになります。
「西武デパートはモノではなく生きがいを売る」と喧伝し、自
分らしく生きるシンボルがブランド品でした。

問題は、農耕型社会や工業型社会のように、大人と子どもの線引きが鮮明ではないことです。子どもも大人同様にお客さまですから、自己実現をめざして勉強する必要があります。

そして、75年ぐらいから不登校が増加してきます。子どもが選択する時代になり、好きな授業だけ受けて下校する児童も出てきました。

産業別就業者の割合によると、75年にはサービス業の第3次産業が50%を超え、今は70%に達しています。経済成長率は、バブルがはじけた91～09年までの約20年間は0.9%とほとんど成長がストップし、今はマイナス成長です。

次に、学習意欲を高校などの進学率でみましょう。1950年の平均42%が、75年には2倍以上の90%超で今と同じです。一方、全国の登校拒否児童・生徒（経済面や病気以外の理由で50日以上欠席）数を66年から96年度までで見ると、最低は小学校では74年の2651人、中学校では72年の7066人です。2110年度では、年間30日以上欠席した不登校の小中学生は2万2000人、中学生は10万人もいます。農繁期の手伝いなどで登校できなかった農耕型社会の長欠児童とは違い、この時代では本人の意思で登校しなくなったのです。

「社会の一員」から「未熟な学習者」に囲う

家族形態も変化しました。「社会の一員」としての子どもから「未熟な学習者」への囲い込みが進んでいます。戦後から75年までは児童労働が禁止されていたこともあり、学校に行くのに有効でしたが、今は学校への囲い込み、保護が過度になってしまいました。

ドイツでは、ホームパーティーの手伝いをさせるなど、大人のなかに子どもを混じらせて、生活者の感覚を与えています。日本では、子どもの小遣いは月決めですが、欧米はあくまでも労働の対価として与えます。クリスマスプレゼントも、子どもから親に贈るほうが多いです。子どもの自立を促す欧米に比べ、日本は勉強だけしていればいい「専業子ども」が多いのです。勉強の目的は生活者としての自立にあると教えないまま、文部科学省も「教育は自分探しの旅だ」と拍車をかけ、家庭や地域での役割分担を消してしまいました。

社会参加・参画の機会も奪われています。工業型社会期に、発達と学力達成という学校教育に乘せられて「未熟な学習者」として保護され、「社会の一員」としての役割を失ってしまったのです。その結果、デリケートで傷つきやすい子ども・若者が増加しました。社会人になるとき、「ほくはこれで終ります」という学生がいました。就職試験などの不安や人間関係の失敗から引きこもってしまうのです。学校が社会的トレーニングを怠ってきたので、社会に恐怖を抱いているのです。

生活感覚が自存感情を育む

これらの反省から、キャリア教育など、最近是多世代が縦横斜めに子どもたちにかかわる流れができてきました。岩手県で被災し家を失った不登校の中学3年生が、避難者の支援をしていました。「人の役に立ちたい」という思いからだといいます。多くの子どもが同じ気持ちを持っていると思っています。

日・韓・中・米の中学生と高校生を比較した意識調査があります。注目すべきは、社会参加への意識が、日本では高校生になると減少し、2人に1人が社会にかかわりたくないと思っていることです。社会科でリアルな社会を教えていないからです。ドイツではナチズム問題をはじめ時事問題に積極的に取り組んでいます。財政危機や環境、放射能汚染など大人の未解決問題にこそ、子どもも参加することが大事です。これが社会性を獲得する一番の筋道です。

ゆとり教育が不評だったのは、20代の若い教師が勉強に専念していた世代であり、総合学習に必要とされる地域の活用能力などに欠けていたからです。総合学習は生活感覚がないとできないので、保護者の方は是非、授業をサポートしてください。

子どもは「未来の市民」

人間形成には3層構造があります。下から上の順で、子どもに愛情をたっぷり注ぎ承認していく①「愛情と存在承認」、役割と社会的承認で当番などを振り当て真剣勝負でリスクを乗り越えていく②「役割と社会的承認」、そして最後が、異世代とかかわり合いながら自分の考え方を調整していく③「自己表出と相互理解」です。

現在の教育に欠けているのは②です。「役割と社会的承認」なしで自己表出はできません。訪問客にお茶を出すなど役割をいろんな場面で経験させることで、自存感情が芽生え、失敗を恐れなくなります。

子どもは未来の市民です。「子ども市民」を育てる教育を学校だけに任せる時代ではありません。生徒会が中心となった働きかけで、横断歩道に信号がついたという事例があります。自分たちでもやればできる、というリアルな社会経験が非常に大事なのです。教科書中心の点数主義では自然や社会を学習し経験することがなごりになり、力がつくが勉強の目的がわからない人が増えてしまいます。

情報・消費社会に生きる子どもたちに、もっと生活者としての感覚を与えていただきたいと思います。小さな役割をこなしていくなかで、自存感情が育まれ社会に出ることを恐れなくなるのです。保護者の方に一層の学校支援をお願いいたします。

第25回

「健康と安全」ポスター展

- 展示期間：平成23年12月22日(木)～平成23年12月27日(火)
- 展示会場：横浜市民ギャラリー ● 応募点数…572点 ● 受賞作品：特別賞19点 入選21点 佳作23点
- 審査委員：横浜市中学校美術研究会会長 西垣 幹雄 先生(横浜市立上の宮中学校長)
横浜市立小学校図画工作研究会会長 橋本 敬子 先生(横浜市立平戸小学校長)

横浜市長賞

「家族仲良く健康な生活」
南瀬谷小学校5年 東倉 真乃



横浜市教育委員会 教育委員長賞



「黄色信号 無理しない」
桜台小学校 4年 越智 夏子

「撮れたらいいこんな写真」
左近山中学校3年 高庭 瑠那



「家族の時間 笑顔の時間」
上の宮中学校3年 小林 渚



横浜市教育委員会 教育長賞

「こつこつあんぜん」
小田小学校1年 梅澤 里奈



「ぼくたちにもできる地球にやさしいこと」
豊田小学校3年 内山 拓海



「環境問題」
洋光台第二中学校2年 山室 仁美



財団法人 横浜市安全教育振興会 理事長賞



「みんなで歩いて楽しくけんこう！」
平戸小学校 4年 三枝木 舞音

「地球に緑を残そう」
川島小学校 6年 寺西 英里彩



「一人ひとりがふれあいを大切にする社会」
三保小学校 2年 巻島 希咲

「環境問題」
洋光台第二中学校 2年 鈴木 美千歌



「地球温暖化防止」
洋光台第二中学校 2年 結城 沙織



「健康は朝食から」
上の宮中学校 3年 中澤 美智

横浜市PTA連絡協議会 会長賞



「あかはあぶない」
綱島小学校 1年 高木 健吾



「森を大切に」
本郷台小学校 4年 川名 柚子葉

「緑が消えてゆく未来のために緑を残そう」
左近山中学校 2年 山本 拓



神奈川新聞社賞



「帰ってさいしょに、まずうがい」
綱島小学校 4年 山口 凜

「海にゴミを捨てないで」
末吉中学校 2年 山田 寛子



「80才で20本」
洋光台第二中学校 2年 岡部 和保



加入状況状況

平成23年度加入状況

校 種	賛助会員数	世帯数
小学校	341	146,469
中学校	139	67,380
高等学校	5	3,917
特別支援学校	12	1,374
総 計	497	219,140

(小学校には、横浜国大附属横浜小が含まれる)

平成23年度役員・審査員名簿

顧問	横浜市教育委員会教育長 山田 巧	
役 職	氏 名	備 考
理事長	齋藤 武彦	学識経験者 ○
常務理事	遠藤志津江	学識経験者 ○
常務理事	渡邊 薫	学識経験者 元小学校長会会長 ○
理 事	今辻千佳也	市教委 指導企画課長
理 事	菅野 孝義	市教委 健康教育課担当課長 ○
理 事	中田一志呂	市教委 生涯学習文化財課長 ○
理 事	山元 泰弘	小学校長会代表 希望が丘小学校長 ○
理 事	鈴木 満	中学校長会代表 吉田中学校長 ○
理 事	佐竹 誠司	特別支援学校長会代表 日野中央高等特別支援学校長
医師理事	鳥山 克佳	学識経験者 市医師会推薦 ○
理 事	峪 文隆	学識経験者 保護司 人権擁護委員
理 事	黒川 典功	学識経験者 元中学校長会会長
理 事	三枝木鉄朗	学識経験者 民生委員 児童委員
理 事	青木俊太郎	学識経験者
理 事	長島 由佳	横浜市PTA連絡協議会会長 ○
理 事	栗原 秀泰	横浜市PTA連絡協議会副会長 ○
理 事	横田 竜一	横浜市PTA連絡協議会副会長
監 事	重内 博美	市教委 総務課長
監 事	鈴木 聖一	横浜市PTA連絡協議会書記
審査委員	新納 憲司	横浜市医師会副会長
審査委員	真部 修	真部歯科院長

○印は審査委員兼務

見舞金等の給付

平成22年度見舞金給付一覧

(平成22年4月1日～平成23年3月31日) (単位) 円

給付別種・事由・対象			給付件数	給付額
1 児童生徒 事故見舞金	(1) 傷害事故	児 童	2,518	27,959,945
		生 徒	197	2,563,280
	(2) 障害	児 童	16	515,950
		生 徒	3	84,100
	(3) 交通事故	児 童	97	295,160
		生 徒	26	78,000
小 計			2,857	31,496,435
2 児童生徒 慰金	(1) 学校管理下外 事故死	児 童	3	1,500,000
		生 徒	2	1,000,000
	(2) 交通事故	児 童	1	200,000
		生 徒	0	0
	(3) 登下校中の 交通事故死	児 童	0	0
		生 徒	0	0
(4) 病死等	児 童	4	120,000	
	生 徒	7	210,000	
小 計			17	3,030,000
3 保護者 慰金		小学校	99	2,970,000
		中学校	104	3,120,000
		高校・特別支援	7	210,000
小 計			210	6,300,000
4 PTA 主催共催 見舞金	(1) 傷害事故		30	666,905
	(2) 障害		0	0
	(3) 交通事故		0	0
	(4) 事故死		0	0
	(5) 往復途次の交通事故死		0	0
	(6) 病死等		0	0
小 計			30	666,905
合 計			3,114	41,493,340
振込手数料			2,132	533,820
総 計				42,027,160

平成23年度上期見舞金給付一覧

(平成23年4月1日～平成23年9月30日) (単位) 円

給付別種・事由・対象			給付件数	給付額
1 児童生徒 事故見舞金	(1) 傷害事故	児 童	1,235	13,336,495
		生 徒	120	1,467,520
	(2) 障害	児 童	1	25,000
		生 徒	0	0
	(3) 交通事故	児 童	41	136,550
生 徒		12	37,550	
小 計			1,409	15,003,115
2 児童生徒 慰金	(1) 学校管理下外 事故死	児 童	0	0
		生 徒	2	1,000,000
	(2) 交通事故	児 童	0	0
		生 徒	0	0
	(3) 登下校中の 交通事故死	児 童	0	0
		生 徒	0	0
(4) 病死等	児 童	3	90,000	
	生 徒	2	60,000	
小 計			7	1,150,000
3 保護者 慰金	小学校		42	1,260,000
	中学校		26	780,000
	高校・特別支援		8	240,000
小 計			76	2,280,000
4 PTA 主催共催 見舞金	(1) 傷害事故		13	247,750
	(2) 障害		0	0
	(3) 交通事故		0	0
	(4) 事故死		0	0
	(5)往復途次の交通事故死		0	0
	(6) 病死等		0	0
小 計			13	247,750
合 計			1,505	18,680,865
振込手数料			1,024	247,170
総 計				18,928,035

平成23年度修学奨励金の給付

小学校	156人
中学校	50人
高等学校	6人
特別支援学校	12人
計224人	7,460,000円

(給付額は小学生3万円、中学生4万円、高校生5万円)

会報の発行

第33号 平成24年2月24日 加入校全世帯へ配布

安全教育推進団体に対する助成

1	申請のあった単位PTAに対する助成	1校4万円(上限)	(円)
		394校	15,610,388
2	区・部会PTA講演会研修会等助成		3,440,000
3	横浜市PTA連絡協議会事業助成		2,550,000
4	横浜市長会教育推進事業		300,000
	第28回横浜港カッターレース		100,000
	第18回若者の飲酒を考えるフォーラム		100,000
	第9回学校給食展示会		200,000
	横浜市民ギャラリー「横浜子どもの美術展2011」		200,000
	ハマキッズ・アートクラブ2011		50,000
	第16回野島クリスマスキャンプ2011		200,000
	磯子区小中学校インディアカ大会		50,000
	第9回横浜市長会小学校ラグビー交流会		100,000
	第53回関東音楽教育研究会神奈川大会		100,000
	(社)横浜勤労青少年福祉協会「夏休みお楽しみ教室」		100,000
	第45回全国小学校理科研究大会神奈川大会		200,000
	神奈川子ども未来ファンド 朗読劇「ハッピーバースデー」		202,500

区・部会講演会研修会の開催

各区・部会において、次の講演会研修会が開催されました。

区名	開催日	事業名	会場	講師
鶴見	12/10(土)	「次の災害に備え私たちに出来ること」	鶴見公会堂	国崎 信江
西	2/17(金)	「地球と遊ぼう」	西公会堂	白井 貴子
中	12/1(木)	「子育てを楽しむ」	横浜開港記念会館	石川 結貴
南	2/4(土)	「震災時にわが子を守るために」	南公会堂	国崎 信江
港南	10/3(月)	「インターネット、携帯電話の安心・安全な使い方」 ～トラブルから子どもを守るため～	港南公会堂	刈野 智喜
保土ヶ谷	11/4(金)	「子どもを守る!見直そう安全教育」 ～危険を予測し回避する能力の育成に向けて～	保土ヶ谷公会堂	渡邊 正樹
旭	10/17(月)	「母親の視点で考える防災対策」 ～危険を予測し回避する能力の育成に向けて～	旭公会堂	国崎 信江
磯子	2/15(水)	「社会人として大事なことは、みんなディズニーランドで教わった」	杉田劇場	香取 貴信
金沢	11/30(水)	「金子みすゞの心をうたう 清水正美コンサート」 ～みんなちがってみんないい」	金沢公会堂	清水 正美
港北	1/30(月)	「震災から子どもたちを守る～3.11東日本大震災を通じて考える～」	港北公会堂	池川 尚美 宮城県学童保育緊急支援プロジェクト
青葉	11/29(火)	「ダウン症の子どもを育てて学んだこと～天使がこの世に降り立てば～」	青葉公会堂	金澤 泰子
都筑	12/5(月)	「佐野有美さん講演会」	都筑公会堂	佐野 有美
戸塚	12/16(金)	「地震からわが子の生命を守る防災教育」	戸塚公会堂	国崎 信江
栄	12/21(水)	第一部・講演「暴力のない社会を目指して」 第二部・100年に一人のフェザー・ヴォイス	栄公会堂	瀧田 信之 Eyes'
泉	11/12(土) 12/10(土)	「"やんちゃ和尚"の熱血名講演～転んだら起きればいい～」 指導者、組織運営研修会 意見交換会「少年非行について」	泉公会堂 JA横浜みなみ総合センター	廣中 邦充 佐藤 辰也
瀬谷	11/28(月)	「子どもの心をつかむコツ～子育てのための心理学～」	瀬谷公会堂	植木 理恵
高校	6/3(金) 11/25(金)	春季研修会「これからの社会が求める人材」 秋季研修会(家庭教育学級)「子育てトークとピアノ弾き語り」	メルパルク横浜 港南区民文化 センター「ひまわりの郷」	北城 格太郎 秦 万里子
特別支援	1/17(火)	平成23年度親の学び、家庭教育支援事業区部(委託) 「障害者の地域生活を支える」～後見の支援制度とあんしんノートの書き方～	横浜市特別支援総合センター	瀧澤 久美子 NPO法人ゆうの風

安全教育団体に対する助成

各団体における活動の一コマ

横浜市PTA連絡協議会助成

- 事業：第28回山下公園ファミリー写生大会
- 実施日：平成23年4月24日(日)
- 展覧会：平成23年5月27日(金)～5月29日(日)(表彰式5月29日)
- 場所：山下公園(写生大会)
桜木町ぴおシティ ゴールデンギャラリー(展覧会・表彰式)
- 参加者：約20,000名

今年度は東日本大震災後の開催でしたので、例年以上に防災に留意した準備・運営をしましたが当日は快晴に恵まれ、多くの家族づれで公園は一杯でした。お弁当を用意してきた家族もあり、明るい日射しの中で楽しく一日を過ごしていました。



区・部講演会・研修会助成(区研修会事例)

- 事例：保土ヶ谷区PTA連絡協議会
- 事業：講演会・「子どもを守る!見直そう安全教育」
～危険を予測し回避する能力の育成に向けて～
- 実施日：平成23年11月4日(金)
- 会場：保土ヶ谷公会堂

防災、防犯を考えるとときに大事なことは、身の回りにある二種類の危険(ハザードとリスク)をいかに少なくするかということです。そして、子どもたち自身にリスク回避の能力を身につけさせるためにどうしたらいいのかを様々な事例やデータを元にわかりやすくお話しいただき、保護者にとっては改めて考えさせられる意義のある講演会となりました。



単P事業助成(小学校事例)

- 事例：横浜市立小山台小学校PTA
- 事業：小山台小学校 地域防災訓練
- 実施日：平成23年9月3日(土)

平成23年度「地域防災訓練」は、3月11日・東日本大震災の教訓から実践的内容となりました。

「防災訓練」には、多くのPTA会員と児童が参加し、震災に対する心構えと知識を学ぶ大切な1日となりました。

炊出し訓練で作った約200食のすいとんも参加者全員で完食!地域・学校・保護者の日頃からのつながりこそ「憂いのない備え」であることを実感した1日でもありました。



単P事業助成(中学校事例)

- 事例：横浜市立あかね台中学校PTA
- 事業：「あかね台夏まつり」での学校紹介
- 実施日：平成23年8月6日(土)

あかね台中学校は平成23年4月に奈良中学校と田奈中学校を親校として開校した新しい学校です。夏休みに地域の公園で行われた「あかね台夏祭り」に昨年に引き続き参加し、『活動のパネル展示』『吹奏楽部のミニコンサート』『小学生へ手作りうちわ・下じき配布』を行い学校の紹介をしました。暑い中、PTA会員や先生・生徒の協力によって準備や練習をしましたが、当日に来た小学生や地域の方々の反応も上々で、とても充実したイベントになりました。



第9回 学校給食展

- 日時：平成23年12月10日(土)
- 会場：新都市プラザエブリデイ
(そごう地下2階入り口前広場)
- 参加：市民の皆さん(3,500名)

学校給食の内容や、栄養教諭・栄養職員の仕事、学校の食育について理解を深めてもらうことを目的に、食育の展示・授業のデモ・はしの豆つまみゲーム・PCでの給食の内容の紹介やゲーム・食生活相談など、市民の皆さんに参加していただける楽しい内容に、今年もたくさんのご参加をいただきました。



第18回若者の飲酒を考えるフォーラム

- 開催日：平成23年12月4日(日)
- 場所：横浜市健康福祉総合センター4階ホール

未成年者の飲酒問題防止を目的とし、横浜市安全教育振興会様をはじめ19団体の後援・助成を賜り開催に至っております。酒害から若者を守るための家庭や社会のあり方について、第1部の基調講演のあと、高校生他6人の方々によるパネルディスカッションをいたしました。パネラー・来場者による熱心な意見交換が行われました。



第16回 野島クリスマスキャンプ2011

- 日時：平成23年12月3日(土)～4日(日)
- 場所：野島青少年研修センター
- 参加者：児童生徒・保護者・ボランティア・実行委員等 95名

今年は会場が東日本大震災の避難所となったので、当初は中止を決めました。7月に入り全員退所したので使用が可能になり急遽開催することになりました。そのため、マンツーマンで支援するボランティアの募集がままならず活動は親子ですることになりました。その結果親子の絆が深まったように感じられました。

今年は先ず津波対策の避難訓練から始め、ディナーは食事ボランティアに

よる、クリスマスの雰囲気溢れたローストチキンでした。食後は、アンサンブル・ド・クレーボンによる弦楽演奏に聴き入り、サンタからのプレゼントに目を輝かせます。2日目の親子クラフト活動でスノーフレークオーナメント作りで楽しみました。

この事業は安振会ははじめ多くの方々に支えられて続けられていることに感謝いたします。

